

【資 料】

明治前期の芸娼妓関係判決（補遺5）

村 上 一 博

目 次

はじめに

【A】芸娼妓関係判決一覧（判決言渡年月日順）

【B】判決例の翻刻

①～⑩ ……第 89 巻 1 号

⑪～⑳ ……本号

㉑～㉒ ……次号

明治 18 年

⑪ 「貸金請求ノ訴訟」（大阪始審裁判所、M18・08・26 判決）

明治 18 年第 410 号

上田㊦

裁判言渡書

原告人大坂府北区平民貸座敷業

梶 川 理兵衛

代言人同府東区今橋四丁目四番地寄留平民

原 一 光

被告人同市北区梶川理兵衛方同居平民芸妓業当時同府南

区平民白井貞次郎方寄留

沖 田 ハ ツ

被告人同府西区平民当時所在不分明

岩 森 ケ イ

被告人同府同区平民席貸業

丹 羽 鶴三郎

右丹羽鶴三郎代言人同府東区北新町一丁目廿三番地寄留
京都府士族

岡 見 東九郎

右梶川理兵衛ヨリ沖田ハツ外二名ニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理シ原告被告双方ノ陳述ヲ聴クニ

原告代言人陳述ノ要旨ハ原告証ノ如ク被告等三名ニ明治十七年十二月八日金額貸与セシ処入用ニ付督促スルモ返済セサルニ因リ速カニ返済センコトヲ請求スト云フニ在リ而シテ原告ハ被告ノ一人岩森ケイハ当時所在不明ナルヲ以テ原告証ノ明文ニ遵カヒ他ノ被告二名ニ於テ本訴ノ金額ヲ全済センコトヲ請求セリ

被告人沖田ハツ答弁ノ要旨ハ本訴ノ金額ハ被告カ借用セシニ相違ナキモ目今手元不如意ナルノミナラス連帶者ノ一人岩森ケイガ他行中ナルヲ以テ同人ノ帰宅マテ猶予ヲ与フルカ然ラサレハ当分ノ間月賦返済ヲ承諾センコトヲ乞フト云フニ在リ
被告代言人岡見東九郎答弁ノ要旨ハ本訴ノ金額ハ被告沖田ハツカ芸妓営業ノ為メ原告ヨリ借入レタル者ニシテ一人ノ借金ニ過キス而シテ其返済方法ノ如キハ別ニ契約書アリテ毎月稼高ノ幾分ヲ以テ返済ニ充ツルコトヲ規定スト雖トモ花柳社会ノ常態往々負債主ノ逃走等ニ由リ債主ノ損失ヲ招クノ憂アルヲ以テ更ニ原告証ノ如キ契約書ヲ納レシメタル者即チ一般ノ習慣ニ從カヒタル者ナレハ被告丹羽鶴三郎ノ如キハ恰モ保証人タルノ位置ニ在ル者ナリ故ニ原告ハ先ツ別契約ノ履行ヲ求メ不可ナル時ニ至リ初メテ原告証ヲ以テ出訴スヘキ者ナルニ然セスシテ直チニ原告証ノ履行ヲ求ムルハ不当ナレハ其請求ニ応シ難ク且本訴金額ノ内原告カ立換タル税金六円ハ毫モ被告ニ関係ナキ者ニシテ性質全ク異ナル者ナルニ別ニ起訴セスシテ同一ノ訴状ニ記載シタルハ訴答文例第廿一条ノ成規ニ背反シタル不法ノ訴訟ナリト云フニ在リ

依テ各証拠ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

被告沖田ハツハ已ニ其義務ヲ認め且岩森ケイカ帰宅スル迄猶予シ若シクハ月賦返済ハ原告ノ承諾セサル所ナレハ速カニ原告ノ請求ニ応ス可キハ勿論ナリトス

被告代言人岡見東九郎原告証ノ外別ニ本訴金額ノ弁済方法ヲ規定シタル契約書アリト主張スレトモ之ヲ証明スル能ハサルニ因リ其陳述ハ採用スルニ由ナシ其提供スル乙第一号証ノ如キハ唯被告等交互ノ関係ヲ規定セシ止マリ毫モ原告証ノ効力

ノ輕重スヘキ者ニアラス故ニ被告丹羽鶴三郎カ原告ニ対スル義務ハ沖田ハツ等ニ
輕重ナキ者トス又六円ノ税金ハ原告カ退願シタルニ因リ別ニ説明ヲ要スル者ナシ
岩森ケイカ当時所在ノ不分明ナルコトハ原被告ノ認ムル所ニシテ義務者ノ内一人旅
行等ノ時ハ他ノ義務者ニ於テ義務ノ精算ヲ為スヘキコトハ原告証ニ明文アルヲ以テ
沖田ハツ丹羽鶴三郎ハ原告ニ対シ原告証ヨリ生スル一切ノ義務ヲ負担スヘキ者トス
右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

被告沖田ハツ丹羽鶴三郎ノ二人ハ原告請求スル金額百貳拾九円ヲ速カニ弁償ス可シ
被告岩森ケイハ所在不分明ニシテ答弁スル能ハサル者ナレハ別ニ裁判ヲ与フル限
ニ非ラス

訴訟入費ハ被告沖田ハツ及ヒ丹羽鶴三郎之ヲ負担ス可シ

明治十八年八月廿六日大坂始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

大坂始審裁判所

判事補 志 方 鍛[㊤]

書記 吉 松 左衛喜[㊤]

⑱ 「約定履行ノ訴訟」（福島始審裁判所若松支庁、M18・10・31 判決）

明治 18 年第 9 号

裁判言渡書

原告人新潟県越後国南蒲原郡平民当時福島県岩代国北
会津郡小沼ソマ方止宿雑業

齊 藤 多平次

被告人福島県岩代国耶麻郡岩田源吉方同居平民娼妓

北 見 ユ イ

代 人山梨県甲斐国中巨麻郡平民当時福島県岩代国北
会津郡寄留雑業

能 執 信 兵

右齊藤多平次ヨリ北見ユイニ対スル約定履行ノ訴訟ヲ審理シ原告人及ヒ被告代人
ノ陳述ヲ聴クニ

原告人陳述ノ要旨ハ被告ハ甲第一号証ノ如ク娼妓ニ身ヲ沈メ居ルヲ曾テ懇意ト為
リ主人武藤三郎平ヘ依頼シ甲第二号証ヲ以テ夫婦ノ約ヲ結ヒ其借用金ヲ代償ニ甲

第三号証ヲ受取タル後商法ノ為メ出京中被告等ハ変心シ留守中金員ヲ他借シタレハ之レヲモ弁償ヲ受ケサレハ約定ノ如ク履行シ難キ旨ニテ之レニ応セサレハ該約定ノ履行ヲ訟求スト云フニ在リ

被告代人答弁ノ要領ハ原告ノ請求ハ被告ニ於テモ大ニ欲スル処ナレハ速ニ約定履行セント云ヒ後チ之レヲ変更シ甲第一号証カ武藤三郎平ノ手ニ在ルヲ奇貨トシ原告カ武藤三郎平ト謀リ被告ノ承諾ナキニ甲第二三号証ヲ作為シ利欲ヲ逞セントスルモノナレハ原告ノ請求ニハ応シ難ト云フニ外ナラス

依テ証拠書類ヲ審閲シ説明ヲ与フル左ノ如シ

抑モ甲第一号証ハ被告カ武藤三郎平ノ借入金ニ対シ差入タル証書ニシテ甲第二号甲第三号証ハ原告ト三郎平ト謀リ作為シタル証書ナレハ被告ノ承諾シタルモノニ非スト陳述スルニ被告カ最前原告ノ請求ハ被告ニ於テモ大ニ欲スル処ナリ云々ノ答弁ト甲第二号証文詞中ニユイ義私方ニ於テ娼妓致居タル処今般貴殿妻ニ相成約定ニテ則チ云々トアリ又原告ノ陳述ト被告相符合シ且甲第一号証ノ被告カ三郎平ニ対スル負債ヲ原告ニ於テ代償シタル確証トシテ原告ノ手ニ存在スル等ニ徴シ曾テ原被告間ニ夫婦ノ約定アリシ実跡ヲ見ルニ足レリ雖然今原告ノ戸籍ヲ調査スルニ原告ハ現ニ正当ノ妻アル者ナリト戸長カ戸籍写ヲ以テ証明セル上ハ原告カ被告ヲ妻ト為サントスルハ重婚ヲ求ムルノ約定ナリトス夫レ斯ノ如ク違法ノ契約ハ仮令双方ノ合意ニ出タリトスルモ固ヨリ其効力ヲ有セサルモノナリ

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

原告カ被告ヲ妻トセントノ約定履行ノ訴願ハ不相立者也

訴訟入費ハ原告ニ於テ負担スヘシ

明治十八年十月三十一日福島始審裁判所若松支庁公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

福島始審裁判所若松支庁

判事補 澤 野 潜 蔵[㊤]

書記 大 塚 源太郎[㊤]

明治 19 年

㊤ 「貸金加判弁償之訴訟」(前橋始審裁判所、M19・05・24 判決)

明治 18 年第 294 号

裁判言渡書

群馬県上野国那波郡平民娼妓貸座敷営業

原告 井 田 ヒ ロ

代言人 中 村 英 嘉

全県全国碓氷郡平民娼妓貸座敷営業

被告 齊 藤 萬 作

代言人 田 所 房五郎

右原告ヒロヨリ被告萬作ニ対スル貸金加判弁償之訴訟ヲ受理シ原被告代言人ノ陳弁ヲ聴クニ

原告代言人陳述ノ要旨ハ甲第一号証ノ如ク明治十五年十月中被告ヲ証人ニ相立テ東京府下芝区桜田善左エ門町第六番地加藤本二郎方同居加藤ツルナル者ヘ金百二十七円ヲ貸付シ其後ツルハ自分方ニ娼妓出稼中同年十一月十四日ニ当リ無断家出シタルヲ以テ百方搜索スルモ更ニ見当ラズ遂ニ三十六ヶ月ヲ経過シタリ而シテ甲第四号証ノ如クツルノ遺留財産等無之レニ依リ当被告ニ対シ本訴ノ金額ヲ請求スルニ有リト云ヒ被告代言人答弁ノ要旨ハ原告於テ加藤ツルノ所在不明ナリトノ申立ハ何等ノ証拠ニ依ルヤ自分呈供ノ証拠物ニ依レハ同人ハ目下本管東京芝区桜田伏見町ニ現住スルノ事実アリ又原告於テ加藤ツルハ越亡後三十六ヶ月ヲ経過シタリト云フモ同人ハ本管ヨリ明治十八年十月十二日失踪シ十九年一月ニ至リ立チ戻リタル形跡アリ到底甲第一号証ニ対シ自分ハ第二義務者ノ置位ニアルヲ以テ借用本人ヲ攔キ直チニ本訴ノ請求ニ応シ難シト云フニアリ

依テ各証拠物ヲ閲ミシ説明スル左ノ如シ

原告於テ明治十五年十月中加藤ツルニ金百二十七円ヲ貸付スル際被告カ保証人トナリシコトハ原告ト被告ノ間ニ毫モ異議アルナシ而シテ加藤ツルカ原告家ヘ娼妓営業出稼中明治十五年十二月十四日越亡セシニ依リ原告ハ甲第九号証ノ如ク同年十二月十九日群馬県令ヘ其旨届ケ出タリ又四月廿六日玉村駅戸長役場ヨリ東京芝区役所ヘ該件ニ付照会ニ及ヒタルニ翌十六年三月十五日ニ至リ甲第七号証ノ如ク回答アリタリ之ニ依リ是ヲ視レハ当時加藤ツルハ其寄留地ニハ勿論本管即チ東京府芝区ニモ滞在セシ者ト言ヒ難シ其後明治十八年十一月四日付加藤藤次郎ヨリ芝区長ヘ差シ出シタル書面即チ甲第四号証ハ加藤ツルハ失踪中ニシテ且ツ無財産ナルコ

トヲ証明セリ然ラハ則チ加藤ツルカ玉村駅越亡後原告ハ搜索ノ為メ相当手續ヲ尽シタルモ更ニ見当ラザルヲ以テ其越亡期日即チ明治十五年十一月十四日ヨリ三十六カ月ヲ算定シ本訴ニ及ヒタルハ敢テ不当ニ非ラズト雖トモ当庁民第五十号ノ照会ニ対シ芝区役所ノ回答ハ加藤ツルハ明治十九年一月廿一日本籍ヘ立ち戻リ現住スル旨ヲ証明セリ如斯キ照会ニ於テハ仮令ヘ同人越亡後三十六ヶ月ハ經過シタリトスルモ原告於テ直チニ当被告ニ対シ本訴ノ金額ヲ請求スル能ハサル者ト認定ス
判決

右ノ理由ナルヲ以テ原告ノ請求ヲ採用スル能ハズ
訴訟入費ハ被告負担スヘシ

明治十九年七月廿四日前橋始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

判 事 小 川 鉄 吉[㊤]

書 記 関 口 昌次郎[㊤]

㊤ 「貸金請求ノ訴訟」(天王寺治安裁判所、M19・06・30 判決)

明治 19 年第 153 号

裁判言渡書

原告人大阪府西区平民貸座敷業

義 村 フ シ

右代人同府同区寄留同府大和国式上郡土族雑業

山 下 成 美

被告人同府南区山田重兵衛方同居平民娼妓業

遠 藤 ト キ

右代人同府西区土族雑業

田 中 信 任

右義村フシ代人山下成美ヨリ遠藤トキ代人田中信任ニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理シ説明ノ上判決スル左ノ如シ

被告於テ原告請求スル金額ハ明治十五年一月ヨリ同十六年十二月迄原告方ニテ娼妓営業中花揚げ高金ノ内ニテ返済シ該証書ハ遺残証ナレハ義務ナシト答弁スルモ原告カ言之レニ反シ被告カ返金セシトノ点ヲ見認ムル証憑更ニ之レナケレハ信用スルニ由シナク其答弁ハ不相立者トス依テ原告請求スル金額五拾九円三拾貳錢被

告之ヲ返済ス可シ

訴訟入費ハ被告ノ担当トス

明治十九年六月三十日天王寺治安裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

天王寺治安裁判所

判事補 毛 利 侃三郎㊤

書 記 服 部 重 文㊤

㊤ 「貸金請求ノ訴訟」（広島始審裁判所、M19・08・31 判決）

明治 19 年甲第 61 号

裁判言渡書

原告人広島県安芸国広島区平民米商

多 田 桂 助

代言人同県同国同区寄留島根県平民

天 野 確 郎

被告人同県同国同区平民芸妓営業

鈴 木 マ ス

同 同県同国同区平民

鈴 木 リ ウ

右マス後見リウ兼代人同県同国同区平民紺屋商

石 川 淳 蔵

右多田桂助ヨリ鈴木マス鈴木リウニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理シ原告本人并ニ
代言人被告リウ并ニ兼代人ノ陳述ヲ聴クニ

原告本人并ニ代言人陳述ノ要旨ハ原告人ハ被告人ノ依頼ニ応シ明治十七年四月以
来被告人カ従来ノ芸妓店営業ヲ引受ケ被告人カ典入セシ衣類ヲ請出シ又新タニ衣
類器具ヲ買求メ被告人ヲシテ該営業ノ監督ヲ為サシメ且依然被告リウノ名義ヲ以
テ営業ヲ為シタルニ爾後営業ノ繁盛ナルニ及ヒ被告人ハ暗ニ原告人ヲ疎外シ私擅
ノ所為ニ涉リ剩ヘ該店カ被告人ノ名義ナルニ乗シ之ヲ横領セントシ該店ハ自己ノ
店ナリ資本金ハ借用シタルモノナリト主張シ財産ヲ隠匿スルノ模様アルニ依リ原
告人ハ明治十八年十二月十六日該店ニ到リ数点ノ物品ヲ持販リタルモ尚遺財アル
ヲ以テ其取戻ヲ出訴シタル処被告人ハ却テ之ニ反訴シ原告人カ持販リタル物品ノ

取戻ヲ求メ資本金ハ借用シタルモノナレハ之ヲ請求スルハ格別物品ヲ持去ルノ理由ナシト抗弁シ遂ニ原告人ハ被告人ノ認説シタルハ物品或ハ誓書ニ指ス所ノ物品ハ是々ナリト証明シ得シハ物品ノ外ハ之ヲ請求シ得サルモノトノ裁判ヲ受ケタレハ原告人ハ其調製シタルハ衣類等ノ交付ヲ求メタルニ被告人ハ竹格子一個ノ外他ニ原告人カ調製シタルモノナシト主張シ之カ交付ヲ為サ、ルニ依リ止ヲ得ス被告人ノ言ニ任セ全員ノ残額ヲ請求スル所以而シテ被告人ハ利息ハ法律上ノ利息ヲ付スヘキモノナリト陳述スレトモ月一步五朱ニテ他ヨリ借入レ支弁シタルコトハ被告人モ之ヲ熟知シ且被告第一号証ニ依ルモ其利息ヲ承諾シ居ルコト明瞭ナレハ利息制限法ニ従ヒ其制限マテニ減下スヘキモ法律上ノ利息ヲ付スヘキ理由ナク又被告人ハ原告人カ物品ヲ持販リタル際十一日間營業ヲ停止シタリトテ金五十五円ノ賠償ヲ求ムレトモ仮令其停業シタルモ五六日間ニ過キサレハ斯ノ如キ賠償ヲ為スヘキ理由ナク又原告人カ飲食シタル代金トシテ金六十八円ヲ請求スレトモ啻ニ斯ノ如キ飲食ヲ為シタルコトナク適往來飲食シタルコトアルモ全ク好意上ノコトナレハ之ヲ弁償スヘキ理由ナシト云フニ在リ

被告リウ并ニ被告マス後見人答弁ノ要旨ハ原告人ハ貸金ノ請求ヲ為スト雖曩ニ原告人ハ貸金ニ非スト申立テ物品取戻ノ請求ヲ為シ被告人ハ借金ナリト申立テタルモ被告人ノ申立相立タス原告第四号証ノ如キ確定ノ裁判ヲ受ケタルモノナレハ今や原告人カ前言ヲ翻異シ貸金トシテ其請求ヲ為スハ不当ノ請求ト云ハサルヲ得ス且原被告人ハ先ニ此事件ニ付確定ノ裁判ヲ受ケタレハ本訴ハ再審ニ係ルヲ以テ裁判ヲ受クヘキモノニ非ス仮ニ被告人カ弁済ノ義務アルモノトスルモ原告人カ物品ヲ持去リタル際芸妓十人カ十一日間停業シタレハ其損害ニ対スル賠償金五十五円又原告人カ明治十七年四月ヨリ明治十八年八月マテ毎月二十日位ツ、被告人方ニ起臥飲食シタレハ之ニ対スル料金六十八円ノ弁済ヲ受クヘキモノアレハ差引壹円五十四錢八厘ノ外弁済スヘキモノナシト云フニ在リ

依テ証拠ヲ閲シ之ヲ説明スルコト左ノ如シ

被告人ニ於テハ本訴ハ再審ニ係ルモノナリト陳述スレトモ先ノ訴訟ハ物品ノ取戻ニシテ本訴ハ貸金ノ請求ナレハ其原因ヲ異ニセルヲ以テ再審ニ係ルモノニ非ス原被告人ノ陳述ノ符合スル如ク被告人ヨリ漸次原告人ニ入金シタル点ニ依レハ原告人カ最初支出シタルハ金員ハ贈与ニ出テタルモノニ非サルコト明瞭ナルヲ以テ之ヲ貸金ト云ハサルヲ得ス

被告人ニ於テハ利息ノコトヲ争フト雖被告リウハ原告人エ計算書ヲ求メタル処被告第二号証ヲ与ヘタレトモ相違ノ記載アルニ依リ之ヲ改正セシメ被告第一号証ヲ受取タリト陳述シ現ニ異議ナク今日ニ保存スル同証ニ依レハ利息トシテ金五十四円ノ列挙シタルヲ以テ最初右ノ利息ヲ認諾シタリト推知スルニ足ル

被告人ニ於テハ原告人ノ起臥飲食シタル料金トシテ金六十八円ヲ反求スレトモ原告人ニ於テ之ヲ認メス且料金ヲ要スル起臥飲食ヲ為シタル証左ナケレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

原告人ニ於テハ先ニ原告人カ被告人方ノ物品ヲ持販リタル際被告人カ数日ノ停業ヲ為シタルコトヲ認メナカラ其損害賠償ノ責ニ任セスト陳述スレトモ被告人カ十一日間停業シタルコトハ当時ノ状況模様ニ徴シテ之ヲ推知スルニ足り又該營業店ノ原告人ニ属セスシテ被告リウニ属スルコトハ其名義ヲ以テ營業シタルコトト原告人ニ属スハ証左ノナキコトトニ依リ明瞭ナリ然ラハ則原告人カ被告人ノ物品ヲ持販リ之カ為メ其營業ヲ停止セサルヲ得サルニ至リタルモノナレハ之レヨリ生シタル損害ハ賠償セサルヲ得サルモノトス而シテ被告人ハ金五十五円ヲ反求スレトモ其物品ヲ持去ラレタル明治十八年十二月ノ前半月ニ於テ収入シタル金額ヲ檢スルニ自家營業者ノ分金三十八円五十四錢壹厘店借營業者ノ分金十二円八十二錢五厘トナリ被告リウニ於テ店貸營業者ノ分ハ壹割ノ利益ナリト陳述スレハ真實ノ入額ハ三十九円八十二錢三厘トナリ又同人ニ於テ衣類等ノ外他ニ毎月ノ純益ナシト陳述スレハ現實ノ損害ハ金二十円ノ相当スルモノト認ム

右ノ理由ニ依リ判決スルコト左ノ如シ

被告人ハ明治十九年六月廿五日ノ計算書ノ原告人カ支弁金ト被告人カ内入金ト其出入シタル年月ヨリ年利一割五歩ヲ加ヘ尚損害賠償金二十円ト共ニ相殺シ其殘預金ヲ原告人エ弁済スヘキモノナリ

訴訟入費ハ原被告人各自弁タルヘシ

明治十九年八月卅一日広島始審裁判所ノ公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

広島始審裁判所

判事補 林 清 作㊤
書記 岡 部 善 明㊤

㊤ 「手数料ノ請求之詞訟」（麹町区裁判所、M19・10・21 判決）

明治 19 年第 507 号

裁判言渡書

原告人東京府神田区平民雑業

今西 伝左エ門

被告人東京府本郷区岡村文吉方同居平民娼妓

渡 辺 は る

代 人同神田区鎌倉郡平民旅人宿営業

渡 辺 新兵衛

右今西伝左エ門ヨリ渡辺はるニ対スル手数料請求之詞訟ヲ審理スル原告人ハ本訴第壹号証ノ如ク第貳号証ニ調印請求ノ委任ヲ受ケ其手数料ハ用弁ノ次第二ヨリ壹円若クハ壹円五拾銭差出スヘキ口約ニテ先方ヘ二日間二度々罷越シ談判ニ及ヒタレハ該口約ニ基キ手数料二日分金壹円要求スト云ヒ被告人ハ本訴証書ハ相違ナキモ原告ハ実父新三郎トハ兼而熟意ノ者ニテ原告カ被告宅ヘ参リ候節娼妓出稼方周旋致ストノコトニテ本証ヲ原告自ラ相認メ調印スヘキ旨申シ聞ケルニヨリ押印シ遣シタル迄ニシテ決テ当時手数料ホヲ相払フヘキ口約ヲ為シタルコトナケレハ本訴ノ要求ニハ応シ難シ又娼妓出稼之儀ハ原告ノ周旋ニヨラス他ノ口ヘ出稼方相運ヒタリト云ヒ其所争ノ点ハ手数料ヲ払フヘキ口約ヲ為シタルモノナルヤ否ニ在リトス依テ説明スル左ノ如シ

本訴第壹号証ノ如ク委任ヲ受ケ用弁ノ次第二ヨリ手数料貰受クヘキ口約ヲ為シタリトハ當ニ原告ノ片言ニ止リ果シテ手数料ヲ差出スヘキ口約アリト認ムヘキ証左ナケレハ原告ハ夫ヲ口実トシ本訴金額ヲ請求スルヲ得サルモノトス

右ノ理由ニヨリ判決スル左ノ如シ

原告請求相立ス

訴訟入費ハ原告之ヲ負担スヘシ

明治十九年十月廿一日麹町区治安裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

麹町区治安裁判所

判事補 福 岡 豊 和[㊤]

書 記 吉 村 純 興[㊤]

① 明治十九年第五百七号

原告 口供

- 一 明治十九年七月中本訴第一号証ノ如ク委任ヲ受ケ其手数料ハ用弁ノ次第二ヨリ壹円或ハ壹円五十銭差出スヘキ口約ニテ先方荒川善七方ヘ二日間ニ凡五六度モ罷越シタレハ一日手数料五十銭ト見積リ二日分金壹円償却受ケ度候事
 - 一 荒川方ヘ罷越シタルハ第一号証ノ如ク依頼ヲ受ケ第二三号証ニ調印ヲ請求ニ有之候事
 - 一 荒川ヘ談判中被告ヨリ調印之儀見合セ呉ルヘキトノコトニ付爾来其俣ニ相成申候事
 - 一 原告ノ宅ト荒川ノ宅トハ凡壹丁斗リモ相隔リ居申候事
 - 一 本訴手数料ハ右口約ニ基キ要求スル次第ニ有之候事
 - 一 被告トハ明治十九年二月頃ヨリ知ル人ニ相成申候事
 - 一 第一号証ハ悉皆原告ニ於テ認メタルモノニ有之候事
 - 一 被告カ当時尾張屋ヘ出稼ホノ儀ハ承知致サス候事
- 右之外申立ツヘキコト無之候

右相違不申上候也

明治十九年十月七日

右

今西 伝左エ門㊤

② 明治十九年第五百七号

被告代 口供

- 一 本訴第一号証ハ交付セシニ相違ナキモ被告ハ曩ニ栃木県下宇都宮池上町ヘ娼妓出稼ノ末東方ヘ帰京シ居タルニ原告ニ於テ尚又娼妓出稼ノ儀ヲ周旋致シ呉ルヘキトノコトニテ已ニ金貳百三拾円ニテ吉原江戸町尾張屋ヘ約定相整ヒタルニ付本証ニ押印致シ遣スヘキトノコトニ付押印致シ遣シタル次第ニテ決テ当時手数料支払渡スヘキ契約ホハ一切為シタルコト無之候事
 - 一 爾後右尾張屋の方ハ破談相成タルニ付第一号証書ノ請求其俣ニ相成申候事
 - 一 其後原告ノ周旋ニヨラス他ノ心配ニテ現今之処ヘ出稼致ス様相成申候事
- 右之外申立ツヘキコト無之候

右相違不申上候也

明治十九年十月七日

右

渡 辺 新三郎㊤

㉓ 「貸金催促ノ詞訟」(中之島治安裁判所、M19・11・18 判決)

明治 19 年第 327 号

裁判言渡書

原告人大坂府北区平民

吉 岡 弥三郎

被告人右同所三好芳八方同居平民娼妓営業

山 本 タ ネ

被告人同府南区山本徳次郎死跡相続人平民

山 本 テ イ

右吉岡弥三郎ヨリ山本タネ外一名ニ対スル貸金催促ノ詞訟ヲ審理スルニ原告人ハ先ニ被告「タネ」ヲ自宅ニ於テ娼妓営業ヲ為サシメタル際本訴証書ニ記載アル衣類ヲ貸渡シ置キタル処其後明治十八年一月十四日被告ハ席ヲ他ニ転シタルニ依リ上文ノ如ク更ニ証書ヲ収メタリ而シテ被告カ差出シタル引合書ナルモノハ其明文ノ通り本人「タネ」ニ示談貸及ヒ親共ニ貸金十四円アルモ其余ニ貸金ナシト記載シタル迄ニテ曾テ被告「タネ」ニ対スル貸金ノ有無ハ記載セサルナリ依テ本訴請求金高ハ速ニ受取りタシト云ヒ被告山本「タネ」ハ原告証書ハ曾テ差入レタルコト之レナク仮リニ之ヲ差入レタルモノトスルモ已ニ遺残ニ属シタル証書ナリ何トナレハ原告方ニ出稼娼妓営業ナシタルハ明治十五年ヨリ明治十八年一月十四日迄ニシテ即チ其席替ノ際別紙引合証明文ノ如ク双方ノ間ニ於テ貸借等更ニ之レナキコト判然セシヲ以テナリ況ンヤ該物品タル原告方ニ営業中故アリテ貰受タルモノニ於テオヤ尤モ被告ハ原告方ヲ立退キタル後ニ於テ改メテ証書ヲ差入ル、如キハ事実上アルマシキコトナレハ該証書ノ真正ノモノニアラサルヤ論ヲ俟サルニ依リ原告ノ請求ニ処シ難ト云ヒ又被告山本「テイ」ハ先代徳次郎ニ於テ該証書ヲ原告ニ交付スヘキ理ナク且ツ被告亦之ヲ認メサルヲ以テ原告請求ニ応スヘキ筋ナシト云フニ在リ因テ証拠物ヲ閲シ説明ヲ為シ併テ判決スルコト左ノ如シ

本訴原告証書ハ被告兩名ニ於テ差入レタルコトナシト云フニ依リ他ニ被告「タネ」及ヒ亡山本徳次郎カ自書ナシタル証書ニ参酌スルニ其記名及ヒ印章ハ毫モ相違スル所ナク又其他該証書ニ瑕疵アルヲ見サルヲ以テ正当ニ受授シタルモノタル論ヲ俟タス而シテ該物品タル被告「タネ」ニ於テ之ヲ貰受ケタリト云フ上ハ現ニ原告ヨリ受取りタルコト亦明瞭ナルニ依リ謂レナク右証書ヲ渡シタルニアラサル事実ヲ

推知スルニ足ルモノトス故ニ該証書ノ義務ハ被告当然尽サルヲ得ス
右ノ理由ニ付九円五十銭金ハヒ告速ニ償却スヘシ
但シ訴訟入費ハヒ告ノ負担タルヘシ

明治十九年十一月十八日於中ノ嶋治安裁判所言渡ス者ナリ

判事補 永 岡 清 治[㊟]
書 記 三 善 卯三郎[㊟]

明治 20 年

24 「町会決議課賦金要求ノ事件」（新潟始審裁判所相川支庁、M20・05・27 判決）

明治 20 年控第 1 号

裁判言渡書

控訴者

新潟県佐渡国羽茂郡平民娼妓惣代

末 武 良 助

右代言人

東京府小石川区平民当時新潟県佐渡国雑太郡寄
留

中 嶋 吉次郎

被控訴者

新潟県佐渡国羽茂郡戸長佐々木伊八郎後任

古 城 俊 平

右古城俊平先任戸長佐々木伊八郎ヨリ末武良助ニ係ル町会決議課賦金要求ノ事件
ニ付相川治安裁判所カ言渡シタル裁判ニ服セズシテ末武良助ヨリ控訴ヲ為シタル
モ本案ノ詞訟ハ原ト町会決議ノ賦課金ヲ被控訴者ノ先任戸長カ娼妓共江賦課セシ
ヲ娼妓共於テ之ニ応セサル逆曩ニ右戸長佐々木伊八郎ヨリ相川治安裁判所江訴出
シ遂ニ伊八郎於テ直者ト相成ルモ元来該事件ノ如キ人民於テ不服ヲ唱ヘ其徴収ニ
応セサルモノアル時ハ其戸長ニ於テ行政上ノ規則ニ依リ処分スヘキ筈ナリ故ニ民
事裁判所ハ其訴訟アルニ当ルモ之カ直曲ヲ裁定スヘキ限りニアラザルナリ因テ控
訴状ハ却下スルモノナリ

明治二十年五月廿七日

新潟始審裁判所相川支庁

始審裁判所判事 木 暮 祐 順[㊤]

裁判所書記 杉 村 近 知[㊤]

㊤ 「養女取戻并復籍ノ訴訟」(大阪始審裁判所、M20・07・06 判決)

明治 20 年第 258 号

大島[㊤]

裁判言渡書

原告人大阪府西区平民貸座敷業天栄ミネ養女芸妓

天 栄 ム ラ

原告人同府西成郡平民大井本之助方全居平民大河内芳

造母雑業

大河内 ヨ ネ

被告人全府西区平民貸座敷業

天 栄 ミ ネ

代言人全府全区江戸堀下通三町目三十一番地寄留京都

府士族

中 村 文 造

右天栄ムラ外壼名ヨリ天栄ミネニ係ル養女取戻並復籍ノ訴訟ヲ審理シ原告人被告
代言人ノ陳述ヲ聴クニ

原告両造陳述ノ要旨ハ原告ムラハ明治十五年中被告ニ金六十円借受ケ芸妓奉公ニ
差遣ハシ表面ハ養女ノ名義ニ致シ置キタルモノナリ然ルニ被告ハムラニ対シ常ニ
客取リヲ為スコシト命シ芸妓稼外ノ事ヲ勸メ苛酷ノ取扱ヲ為スニ付原告ムラモ被
告方ニ居堪ヘサルヲ以テ今般出訴シテ養女取戻及復籍ノ義ヲ請求スルモノナリト
云フニ在リ

被告代言人答弁ノ要旨ハ原告大河内ヨネハ元ト貧困ノ者ニシテ明治十五年原告ム
ラヲ養女ニ使ハスト云フニ付其節金六十円ヲ与ヘ養女ニ貰受ケタルモノニシテ決
シテ奉公人ニ雇タル者ニアラス其後ムラハ芸妓ハ致サセタルモ全人ニ対シ客取等
ヲ勸メタル様ノコトハ更ニ無之然ルニ原告ムラハ元来不品行ノ者ニテ外ノ茶店ニ

於テ客取ヲ為シタルコトハ被告モ聞及フ所ノモノナリト云フニ在リ

依テ各証拠ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

本訴ニ於テ原告ハ被告カ芸妓稼ノ外ニ客取商売ヲ原告ムラニ勸メタリト云フヲ理由ト為シ養女取戻及復籍ヲ請求スルモノナリト雖トモ被告カムラニ対シ客取商売ヲ勸メタリト云フハ単ニ原告両名ノ陳述ニ止リ毫モ之ヲ証明スルモノナク又他ニ養女取戻ノ原由トナルヘキモノヲ原告ヨリ呈出セサルニ付原告ハ被告ニ対シ本訴請求ノ權ナキモノト看做サ、ルヲ得ス

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

原告天栄ムラ外壱名ハ被告ニ対シ更ニ養女取戻ノ原由トナルヘキ事實ヲ証明セサル間ハ本訴養女取戻並復籍ノ權ナキモノ也

但訴訟入費ハ各自弁タル可シ

明治二十年七月[六日]大阪始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ才判ヲ言渡スモノ也

始審裁判所判事 鶴 見 守 義[㊞]

裁判所書記 村 田 隆 治[㊞]

㊞ 「嬰兒引渡約定履行請求ノ訴訟」（東京始審裁判所、M20・09・29 判決）

明治 20 年第 791 号

裁判言渡書

原告 神奈川県横浜区寄留東京府平民芸妓営業

佐々木 タ ツ

代言人東京府浅草区上平右エ門町二番地寄留茨城県平民

内 藤 五 郎

被告 同府本所区平民清水喜四郎方同居平民報知新聞社員

清 水 孟 三郎

代人 同府北豊島郡浅草区土族無職業

杉 本 朔

右佐々木タツヨリ清水孟三郎へ相係ル嬰兒引渡約定履行請求ノ訴訟ヲ審理シ原被告双方ノ陳述ヲ聴クニ

原告代言人陳述ノ要旨ハ明治十八年七月初旬ヨリ相互ニ情ヲ通シ爾來交情益親密ナル折柄同年八月中胚胎シタルヲ以テ其旨ヲ被告ニ告ケ被告モ亦其安否ヲ訪ヒ遂ニハ原告ノ宅ニ宿泊シ其待遇恰モ夫婦ノ親睦ト同ジカリシ茲ニ於テ原告ハ被告ノ申奨メニ從ヒ金三百円ヲ申受ケ從來ノ營業ヲ廢シ東京ニ移住セントシタリシモ妊娠月ヲ重ネ起臥自由ナラサルヨリ先ツ函嶺ノ温泉ニ浴シ其間宜ク現住地ヲ引払フ可キ計畫ヲ為シタルコトハ甲第三号証ノ書簡ニ徴シ明白ナリ然ルニ函嶺行中其引払ノ準備ヲ中止ス可キ旨ニ二三ノ者ヨリ差止メラレ同年十月卅一日ヲ以テ歸リ其翌年五月十八日一ノ男児ヲ掌ケ名ヲ高之助ト号ケ其旨ヲ被告ヘ報告シタル處該男児ハ被告ニ於テ引取ル可キ口約ニ之アリシ然ルニ被告ニ於テ該男児ヲ引取ラサルニ付止ヲ得ス勸解願出ル處甲第貳号証ノ如ク該男児ヲ被告ニ於テ引取ル可キ熟議行届キ其執行中明治十九年七月廿二日迄済口願書捧呈ノ猶予ヲ願出タル事實ニ之アレハ決シテ被告カ申立ル如キ次第ニハ之ナシ以上縷陳スル事實ナルヲ以テ男児高之助ヲ被告ニ於テ引取ル可キ裁判仰キ度ト云フニ在リ

被告代人陳述ノ要旨ハ明治十八年七月下旬ヨリ同年十月下旬迄原告方ヘ遊ヒニ行キシコトアルヲ以テ其間原告ト情ヲ通シタルコトアル可クモ本訴原告カ引渡シヲ請求スル男児ハ被告ノ胤子ニアラス故ニ之ヲ引取ル可キ約束モ為シタルコト曾テ之ナシ然ルニ不法ニモ原告ハ明治十九年六月中突然嬰兒引渡ノ勸解ヲ本所區治安裁判所ヘ出願シ已ニ本年七月十九日出廷ノ際互ニ論議ノ末尚ホ同月廿二日迄ノ猶予ヲ相願コトニ決シタリ其際原告代人福地龜太郎ナルモノ其猶予願書ヲ認メ之ニ調印ス可キ旨申スニ依リ一応披見スル處嬰兒引取云々ノ行文記載アルニ依リ之ヲ拒ムモ右ハ一般ノ文体ナルニ付之ニ調印ヲ為セヨトノコトニ付直ニ該猶予願ニ調印ヲ為シタル處豈図ンヤ其猶予願ヲ当公廷ニ提出セラレ本訴ノ權利義務ヲ相争フノ証拠ト為サレタルハ遺憾千万ノ至リナリ然レトモ該猶予願ハ以上陳述スル如ク巧言以テ人ヲ欺キ被告ニ調印ヲ為サシメタルモノナレハ裁判上決シテ其効ヲ有ス可キモノニアラス況ンヤ該証ト裁判所ヘ対シ止タ猶予ヲ願出タル一片ノ願書ナルニ於ケルオヤ殊ニ原告人ハ當時芸妓ノ業ヲ營ミ獨リ被告ノ為メ身体ヲ束縛セラレタルモノニアラサレハ飽マテ被告ノ胤子ナリト主張スルハ不当ナリ以上縷陳スル次第ナルニ付本訴ノ請求ニハ応シ難シト之フニ在リ

因テ証拠事實ヲ閱シ説明スル左ノ如シ

明治十八年七月下旬ヨリ同年十月下旬迄原告方ヘ遊ヒニ行キタルコトアルヲ以テ

其間原告人ト情ヲ通シタルコトアル可シトノ申立ト被告本人自ラ勸解庁へ出廷致シ甲第式号証ノ如ク該嬰兒ヲ引取ル可キ旨自認シタル証左トニ由テ觀レハ本訴原告カ引渡シヲ請求スル嬰兒ハ全ク被告ノ胤子ニシテ被告自ラ其嬰兒ヲ引取ルコトヲ承引シタルモノト信認スルニ付本訴ノ嬰兒ハ被告ノ胤子ニアラス又甲第二号証ハ原告ニ欺カレ調印ヲ為シタルモノナリトノ申分採用スルヲ得ス

判決

前頭ノ理由ナルヲ以テ本訴原告カ引渡シヲ請求スル嬰兒ハ被告ニ於テ引取ル可シ但シ本訴ハ原被ノ間ニ争ケタル嬰兒ノ争訟ニ係ルヲ以テ訴訟入費ハ各自弁ト心得可シ

明治廿年九月廿九日東京始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

始審裁判所判事 茂手木 慶 信[㊤]

裁判所書記 木 村 惟 孝[㊤]

① 上申書

- 一 明治廿一年執行第三百七十七号[事]件ニ付左ニ上申仕候
- 一 本案ハ嬰兒引渡ノ約定履行ノ才判確定后嬰兒死亡致シ其遺骨引渡シノ執行ニ係ル而シテ其遺骨引渡ハ本案確定才判ヲ以テ執行スベキ者ト思料仕候抑嬰兒死亡スルニ其以外ハ全ク土芥ト化シ之ニ対シ親タル者ノ責務全ク脱シタルモノナラバ随テ本案確定才判ノ執行力モ是ニ於テ消滅スル者ノ如シト雖本案ハ決シテ然ラズ何トナレバ嬰兒ハ遺骨ト化シタルモノヲ埋葬シ之カ冥福ヲ祈ルノ責任ハ親タル者ニ在テ而シテ其責任義務即チ清水孟三郎ニ販スルハ曾テ確定才判ノ命ズル処ナレバナリ然レバ此確定才判ヲ以テ遺骨引渡シヲ執行スルハ当然ノ事ト存候倘シ然ラズシテ本案確定才判ハ嬰兒引渡ヲ命シタルモノニシテ該才判ヲ以テ遺骸ヲ引渡スノ裁制之レナキ者トシ以テ更ニ遺骨引渡ノ訴訟ヲ起サンカ法律ハ之ヲ認メテ一時再理ノ名称ヲ附スベシ何トナレバ約定アルニ因テ嬰兒ヲ其父ニ引渡スモ又遺骨ヲ引渡スニ販スル所同一ナレバナリ故ヲ以テ該遺骨引渡ハ本案確定才判ノ執行権内ニ属スル者ト確信仕候得バ何卒遺骨引渡相成候様義務者へ御命令成下度此段上申仕候也

明治廿一年六月四日

権利者代言人 内 藤 五 郎[㊤]

東京始審才判所

判事 茂手木 慶 信殿

(朱書)

「本案訴訟ハ嬰兒ヲ引渡ス可シトノ裁判ニシテ死骸ヲ引渡スベキ旨ノ裁判ニアラサルヲ以テ本案執行ヲ棄却スルモノ也

明治廿一年六月五日

東京始審裁判所」

27 「養女取戻并ニ復籍事件」(大阪控訴院、M20・10・21 判決)

明治 20 年第 391 号

裁判言渡書

控訴人大阪府西区平民貸座敷業天栄ミネ養女芸妓

天 栄 ム ラ

控訴人同府西成郡平民大井本之助方同居平民大河内芳
造母雑業

大河内 ヨ ネ

代言人同府西区江戸掘下通一丁目三十六番地寄留同府
大和国添下郡東岡町三十七番地土族

相 川 吉 孝

被控訴人同府西区平民貸座敷業

天 栄 ミ ネ

代言人同府同区土佐堀裏町九番地寄留福井県土族

竹 澤 節 蔵

右天栄ムラ外一名ヨリ天栄ミネニ係ル養女取戻并ニ復籍事件ニ付大坂始審裁判所
カ言渡シタル裁判ニ服セス天栄ムラ外一名ヨリ控訴ヲ為シタルニ依リ之ヲ審理シ
双方代言人ノ陳述ヲ聴クニ其要領左ノ如シ

控訴代言人陳述ノ趣旨ハ天栄ムラハ大河内ヨネノ女ニシテ曾テ養女ノ名義ヲ以テ
被控訴人家ニ芸妓稼ノ為メ差遣シタル所元來被控訴人ハ氣遣ノ性質ニシテ平素苛
酷ノ取扱ヲ為ス而已ナラス近頃ムラニ対シ營業外ナル客取りヲ勸メムラハ本年旧
曆十九歳ナルニ虚弱ニシテ之ニ堪ユル能ハサルトムラノ伯母木村エイナル者病死
シタルニ付之カ遺言ニ依リ死跡相続ノ都合アルトニ依リ被控訴人ヘムラノ取戻ヲ

求ムルモ応セサルニ付已ムヲ得ス出訴及ヒタル所以ナレハ始審裁判ヲ取消サレ訴旨相立様ノ覆審ヲ乞トノコト

被控訴代言人陳述ノ趣旨ハ天栄ムラヲ養女トナシタルハ乙第一号証ノ通りニシテ爾來戸籍ニ騰記^(ママ)シ且教育歌舞等修行ノ為メ許多ノ金員ヲ要シタル者ニシテ控訴人カ之ノ如キ芸妓出稼ニアラス又客取りヲ勸メ或ハ苛酷ノ取扱ヲナシタルコト毛頭無之且又木村エイナル者ノ死跡相続ノコトハ控訴ニ於テ始メテ申立タルコトニテ信用シカタキ事実ナレハ到底本訴ノ求ニ難応原裁判ノ認可ヲ乞トノコト

依テ証拠ヲ審閲シ弁論ヲ聴キ説明スル左ノ如シ

乙第一号証ニ養子娘ニ差遣シ候処相違無御座ト在テ別ニ控訴人ハ反証ヲモ取置カサル者ナレハ天栄ムラハ芸妓出稼ニシテ養女ニ差遣シタルニ非ストノコトハ信用スルヲ得ス又被控訴人ヨリ平素苛酷ノ取扱ヲナシ且ツ客取りヲ勸メラレ之ニ堪ユル能ハサルトノコト及ヒ木村エイノ死跡相続ノ為メ取戻ヲ求ムト云フ等ノ如キ果シテ苛酷ノ取扱ヲ受ケ且ツ客取りヲ勸ラレタルカ又エイハ其遺言ヲ為シタルカ要之ニ口頭無証ニ止マリ他ニ視ル可キ事実モナケレハ到底控訴人ハ本訴養親子間ノ離脱ヲ求ムル謂レナキ者トス

右ノ理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

大坂始審裁判所カ明治二十年七月六日言渡シタル裁判ハ相当ナルヲ以テ之ヲ認可ス由テ控訴不相立儀ト心得可シ

訴訟入費ハ始審終審共双方自弁タル可シ

明治二十年十月廿一日大坂控訴院公廷於テ終審ノ裁判言渡ス者ナリ

大坂控訴院民事第一局

評定官 近 重 八潮彦㊞

評定官 井 上 操㊞

評定官 音 羽 安 成㊞

書 記 松 井 耕 蔵㊞

明治21年

㊞ 「養女名義取消ノ訴訟」（神戸始審裁判所姫路支庁、M21・01・31判決）

明治20年第88号

小埜巽[㊦]

副 小室[㊦]

裁判言渡書

兵庫県摂津国神戸区当時同県播磨国飾東郡結城
吾市郎方止宿平民下駄職原告竹廣ムメ代人同県
同国同郡寄留京都府平民英語教授

原告 猪 飼 定次郎

同県同国飾東郡揚弓店[貸席・・・削除]営業田邊ハ
ル代言人同県同国同郡寄留高知県平民

被告 沼 義 満

同県同国同郡平民揚弓店[貸席・・・削除]営業田邊
ハル養女娼妓

引合人 田 邊 ス ミ

右竹廣ムメヨリ田邊スミニ対スル養女名義取消ノ訴訟事件審理ヲ遂クル処

原告人竹廣ムメ陳述ノ要旨ハ明治十三年一月中原告ムメノ夫ニシテ引合人スミノ
実父タル文七ナル者病死シ当時薬料其他死後ノ万端取方付ニ多額ノ費用ヲ要シテ
困難ノ折柄仲人福本捨吉ナル者ヲ媒介トシ右娘スミヲバ被告方ハ娼妓ニ遣ハシ金
七十一円ヲ借用シ其際娼妓ト為スニハ先方ノ養女トセネバナラストノ事ヨリ是亦
承諾シテ乙壺号証ノ如ク致シタレトモ其实永ク養女ニ遣スベキ意思ニハ無之故今
ヤ該名義ハ取消シ貫ヒ度然ル上借用金ノ弁済ニ不足生スルナレバ竹廣スミノ名義
ニテ娼妓稼ギハ致サセ弁済スベキ考ヘナリト云フニ在リ

被告代人ノ陳述ハ事実本人申立ノ如シ而シテ被告ハ乙壺号乃至乙第四号証ヲ提出
シテ以テスミノ養女名義取消スベキ理由ナク亦取消スノ理由アリトスルモ恩与金
并ニ取換金等ヲ返済セサレハ養女取戻サストノ特約モ有之故原告ノ訴求ニ応スベ
キ者無之ト主張スレトモ右四号証并ニ甲壺号式号証等ニ照セハ則スミハ其实普通
ノ養女ニアラスシテ全ク原告ノ困難ナリシ時金円ヲ得テ娼妓営業ヲ為サシムル為
メ名義ノミ養女トナセシ者ナルコト判然タルノミナラズ若シ之ヲシテ強テ被告申
立ノ如ク該金円ヲ返済セサレハ養女名義ヲ取消サストナレバ是即違法ナル人身売
買ニ異ナラサルガ故遵守スベキ者ニアラザル也云々申立テタリ

被告人田邊ハル陳述ノ要旨ハ被告ニ於テ明治十三年一月中ニ原告ヨリ娘スミヲ養
女ニ貰ヒ受ケタルハ行末自家ノ相続人トモ為スノ心得ナリシ而シテ其際結納金七

十一円ヲ与ヘタルモ貸金ニアラサルガ故今更スミハ原告請求ノ如ク養女名義ヲ取消スベキ者ニ無之又前キニ本件勸解中自分病氣ニ付代人大西彦兵衛ヲ差出シタルニハ無相違モ甲一号証ノ如ク申立シカ如何ハ承知セス云々

被告代言人陳述ノ要旨ハ明治十三年三月頃原告也スミノ兄也等ガ難渋ヲ極メタル際仲人福本捨吉ノ媒介ニ依リスミヲ被告方ヘ養女ニ貰ヒ受ケタリ而シテ原告及其兄等ヲ救ハンニハ金ヲ要スル趣キニテ七拾壺円ヲ贈与セリ其後スミハ被告ハルニ於テ右実母并ニ実兄等ヲ救ハレタル恩ニ酬ヒンメメ娼妓營業ヲ為スベシト云ニ因リ凡テ協議上官許ヲ得テ營業致シ居ル訳ニシテ決シテ娼妓ト為スベキ為メニ養女トシ貰ヒタルニハ無之故元ヨリ違法ノ人身売買ニアラズ亦且仮リニ養女名義ハ取消シ得ベキ者トスルモ立換金等一切弁済ノ上ニアラサレバ該名義モ取消サズトノ契約有之云々主張シテ乙壺号乃至乙第四号証ヲ提出セリ

引合人スミ申立ノ要旨ハ自分ニ於テ当初契約ノ旨趣ハ之ヲ弁セズ只子ニ行クトノコトニテ行キタル上娼妓稼キヲ為シ居ル訳ニテ借用金サヘ払ヘバ実家ヘ帰ラル、コトト思ヒ居ル尤モ乙壺号乃至乙第四号証ニ自署セシ覺ヘハ有之云々

仍テ一切ノ証拠書類ヲ審閲シテ説明スル左ノ如シ

凡ソ養女貰ヒ受ケノコトタル必スシモ一家相続ノ為メノミナラズ或ハ一旦養子トナシ再ヒ転シテ他家ヘ縁附カシメ或ハ之ヲシテ別家セシムル等種々之原因目的ハ可有之モ要スル所初ヨリ之ヲシテ賤娼婦タラシムベキノ目的ヨリ金錢等ヲ贈与シテ養女ト為シ以テ賤業ヲ営マシムル如キハ人倫上ノ大義ニ於テ許スベカラサル事タリ然而シテ本件被告ニ於テハスミハ眞実養女ニ貰ヒ受ケタル者ニシテ行末相続人トモ為スベキ考ヘナリ云々申立レトモ抑甲壺号証ハ則該件勸解中ニ被告代人ガ陳述セシ口供ニシテ結局其末文ニ於テ當時ノ代人ハ曾テ貸渡金額并ニ立換ヘタル金額ノ返却ヲ受ケサレハ原告ノ請求ニ応セズ云々ノ文詞アリ又乙壺号乃至第四号証ヲ閱ミスル処其当初ヨリ原告ノ夫ニシテスミノ実父タル文七ナル者病死シテ困窮ノ余リスミヲ以テ被告ノ養女トナシ而シテ初メニ樽代金トシテ七十一円ヲ受授シ了リ其後モ亦種々原告ハ被告ヨリ恩与金ノ名義ヲ以テ大小ノ金円ヲ受ケ居レリ因テ今ヤ之ヲスミニ質スニ当初契約ノ旨趣如何ハ知ラサレトモ只子ニ行クトノコトニテ行キタル訳ニテ到底借用金サヘ払ヘバ実家ヘ帰ヘリ得ベキノ考ヘナリト陳述スルノミナラズ前後原被告一切ノ証拠書類ノ文旨也及ヒ被告分家タル田邊ナカ方ハ当初ヨリ娼家ナリスミガ被告方ノ養女名義トナリシヨリ直ニ娼妓營業ノミ

為シ居ル等ノ事實ヨリ推考スルトキハ原被告并ニスミ等ノ關係ハ實際上真ニ正当ノ養女タル形跡ハ無之シテ却テ原告申立ノ如ク初ヨリスミノ父即原告ノ夫ガ病死ノ際ニ臨ミ困窮措ク処ナキヨリ無余儀スミヲ以テ娼妓トナシ其營業ヲ引当ニシテ予メ金円ヲ借用センガ為メ唯其名義ヲバー一時被告ノ養女ト為シタルニ過キサル者ト看認ムルニ充分ナリトス夫レ然リ然ハ則名ハ空シク為ス可ラズ必スヤ其実ニ從テ養女名義ハ取消サ、ル可ラサル者タリ而ルニ尚亦被告代言人ハ該名義ハ仮リニ取消シ得ベキ者トスルモ立換金等一切ノ弁済ヲ遂ケサレバ之ヲ取消サジトノ契約アリト主張スレトモ斯ル一方ニ有害ニシテ一方ニ無益ナル契約ハ遵守スルノ必要ハ無之也何者則本件ハ原告ニ於テ既ニ受ケタル立換金等ノ勘定モセズ直ニスミノ身体ヲ引取ルベシトニハ無之シテ只無実ナル養女名義ノ取消シヲ求メテ向後尚不足金等アラバ実家ノ名義ニテ該營業ヲ致サセ漸次金円弁済モ致サシムベシトノ事ナレバ實際上被告ニ於テ損害ノ生スベキ謂ハレナク若シ亦強テ皆金弁済ノ上ナラデハ何時迄モ該名義取消サズトセンカスミハ則永ク事實不当ナル仮面ノ養家ニ戸籍上養女タラザル可ラズ既ニ其養女タリ終身其身ヲ拘束セラレンモ亦測リ難シ是ニ至テヤ即原告代人申立ノ如ク違法ナル人身売買ノ契約ナリト謂ハレンモ亦實ニ止ム可ラサルノ事タリ

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

被告ハ速ニ原告ノ求メニ応シテスミガ被告方ノ養女名義ハ之ヲ取消スベシ引合人スミモ亦右之如ク心得ヘシ

但シ訴訟入費金拾貳円八拾錢ハ被告ヨリ原告方ヘ償却ニ及ブ可シ

明治廿一年一月卅一日神戸始審裁判所姫路支庁公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

神戸始審裁判所姫路支庁

始審裁判所判事 吉 田 正 進㊤

裁判所書記 栗 本 又 四郎㊤

㊤ 「貸金催促之訴訟」(山口治安裁判所、M21・03・19 判決)

明治 21 年第 12 号

裁判言渡書

原告人大分県豊前国下毛郡居住平民料理商

井 上 新 吉

被告人山口県周防国吉敷郡寄留平民芸妓

益 谷 イ セ

同 同居平民

益 谷 ク マ

右代人同県同国同郡平民

津 村 忠 吉

右井上新吉ヨリ益谷イマ外名ニ対スル貸金催促之訴訟原告ハ開廷期日ニ出頭セサルヲ以テ欠席ノ俣審理ヲ遂クルニ被告ハ原告ノ提供スル甲第壹号証タルヤ被告クマ於テ明治壹九年中豊前南坂川町ニテ芸妓営業ヲ為シタル節若干金ノ前借アリシニ原告ニ欺レ多分ノ損失ヲ蒙リタルヲ以テ彼ノ地ヲ去サントスルニ当リ不当ノ計算トハ思料セシニ婦女ノコトナレハ被告ノ言ニ任セ差入レタル者ニシテ真実借金セシモノニアラス且昨年原告カ返金ヲ促シタル際予テ預ケ置キタル衣類三味線等以テ差引致シ度旨示談ヲ遂ケタルニモ拘ハラヌ出訴シタルニ付反証ヲ取調フル為メ答書猶予中原告ハ訴狀願下ケ帰県スル由通知セシ次第ナレハ旁以テ其訟求ニ応スル能ハスト云ヘリ

依テ被告ノ申立ヲ聴キ説明スル左ノ如シ

原告ハ無断帰県セシ旨止宿主ヨリ届出タルヲ以テ被告カ申立所ノ事柄ヲ記載スル答書ヲ送達セシメタルニ尚ホ何事ノ反駁ヲモ為サス審判期日出廷セサルモノナリ個ハ畢竟被告ノ抗弁ヲ是認シ訴権ヲ抛棄シタル者ト認定セサルヲ得サルナリ

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

原告ニ於テ被告兩名ニ対シ貸金五円四拾銭ヲ要求スル其訴権ヲ抛棄シタル者トシ訴訟ヲ排斥スル者ナリ

訴訟入費ハ原告ノ負担タルヘシ

明治廿一年三月十九日山口治安裁判所公廷ニ於テ初審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

治安裁判所判事 乾 智 一[㊞]

裁判所書記 河 野 貞 輔[㊞]

30 「約定履行請求ノ訴訟」（福知山治安裁判所、M21・07・10 判決）

〔事件番号不明〕

裁判言渡書

京都府丹波国矢田郡平民席貸業

原告 鬼 頭 八 重

大坂府南区平民芸妓業当時原告加藤宗平方寄留

被告 小 野 ハ ナ

大坂府南区平民仲仕業

被告 小 野 清 蔵

約定履行請求ノ訴訟ヲ審理スルニ原告人ニ於テハ原告第一号第二号証ニ基キ金四拾八円ヲ被告ヨリ弁済受クルカ否ヲサレハ契約年限間被告ハナニ芸妓営業ヲ為サシムルカ二者ノ履行ヲ求メタレトモ被告ハナハ芸妓ヲ廃業シ正業ニ復シタシト申立ル上ハ原告ハ強テハナニ芸妓営業ヲ為サシムルノ權利ナキニ付此ノ点ノ請求ハ之ヲ止メ金四拾八円ヲ被告共ヨリ直チニ返済受ケ度ト云ヒ被告共ニ於テハ金四拾八円ヲ借用シタルニ相違ナキモ手元不如意ニ付拾銭宛ノ月賦ニアラサレハ返済シ難シト云ヘリ

依テ証拠ヲ閲シ説明スル左ノ如シ

被告ハ月賦ニアラザレハ返済シ難シト云フモ原告第一号証ニ壱ケ度ニテモ相滞候節ハ（中略）一時御取立ニ相成トモ一言ノ申立無之トアル上ハ該契約ニ基キ一時皆済スヘキハ当然ニ付被告カ抗弁ハ採用シ難シトス

右ノ理由ナルヲ以テ判決スル左ノ如シ

原告第壱号証金四拾八円ヲ被告兩名連帶シテ返済スヘシ

訴訟費用ハ被告ノ負担タルヘシ

明治二十一年七月十日福知山治安裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

治安裁判所判事 服 部 純 吉[㊤]

裁判所書記 亀 井 種 蔵[㊤]

㊤ 「廃業差拒ノ訴訟」（名古屋始審裁判所、M21・08・06 判決）

明治 21 年第 112 号

裁判言渡書

原告人愛知県尾張国名古屋区席貸営業伊藤シヤウ方寄
留同区平民鬼頭庄七長女

鬼 頭 八 重

被告人同県同国平民席貸営業

伊 藤 シヤウ

右代言人同県同国園井町二百十番戸平民

依 田 菊太郎

右鬼頭八重ヨリ伊藤シヤウニ係ル廃業差拒ノ訴訟ヲ審理シ双方ノ陳述ヲ聴クニ原告陳述ノ要旨ハ原告ハ親族協議ノ上明治二十年二月ヨリ被告シヤウ方ニ寄留シ娼妓営業ヲ為シタレトモ其出稼以來多病ニシテ営業ニ堪ヘ難ク此俟営業セハ摂生上大害ヲ醸スニ付良夫ヲ迎ヘ正業ニ就カント欲シ廃業セントスレトモ楼主即チ被告ハ其連印ヲ拒ムニ依リ速カニ連印セシムル為メ本訴ヲ起シタリ而シテ被告ハ乙一号証ヲ以テ原告ニ金四百円ノ貸金アリト云フモ其実内金五十円ヲ借用シタルノミナリ其金ハ乙二号証ノ如ク娼妓營業収益ノ内ヲ以テ返済スル約ヲ為シタルニ相違ナキモ元來原告ノ身ハ売買シタルニアラサレハ該金ノ為メ原告ノ身ヲ束縛セラル、道理ナシ且ツ人ハ天賦ノ自由ト權利ヲ保有スル者ナレハ万般ノ事己レノ随意ナリ殊ニ該業ノ如キハ為スト為サ、ルトヲ他人ノ左右シ得ヘキコトニアラス被告ヨリ借用シタル金ノ如キハ本訴外ノモノナレハ被告ヨリ別ニ訴ヘサレハ其答弁ヲ為サスト云フニ在リ

被告代言人答弁ノ要旨ハ原告ハ親養育且負債弁償等必死困難ニ付被告方ニ娼妓出稼ヲ為シ其収益金ヲ以テ返済スルニ依リ金四百円借用致度トノ懇請ニ依リ明治二十年二月四日金四百円ヲ貸与シ乙一乙二号証ヲ受取タリ而シテ同月七日ヨリ原告ハ娼妓相稼キタレトモ自俣ノモノニテ充分ノ稼ヲ為サ、ルノミナラス再度家出シ其稼高ノ如キハ僅カニ三十六円余ニシテ未タ返済相立タサルナリ抑モ乙一号証ノ金員返済ハ原告カ娼妓營業収利ヲ目的トシテ貸借シタル契約ナレハ之レカ弁済ヲ為サ、ル上ハ擅マニ廃業ヲ為スヘキモノニアラス尤モ原告カ真ニ多病ニシテ営業ヲ為ス能ハサレハ相当医師ノ診断書ヲ以テ之ヲ証明セハ被告ハ毫モ拒マサルナリ然レトモ原告ハ決シテ多病ニアラス故サラニ廃業セントスルモノニシテ已ニ身代限ヲ為シ四百円ノ大金ヲ被告ヘ損失セシメントノ奸策ニ過キサルニ付斯ル要求ニハ応シ難シト云フニ在リ

依テ証拠書類ヲ審閲シ双方ノ弁論ヲ聴キ説明スル左ノ如シ

原告ハ多病ニシテ娼妓營業ニ堪ヘサル旨申立ルト雖モ病氣ナリト看認ムヘキ証左

ナク若シ果シテ多病ナレハ乙二号交換契約書第九条ニ（席主方ノ負債ヲ終ラサルニ稼人疾病ニ罹リ休廃業ヲ為サントスルトキハ駆牒院医師ノ診定ニ任セ相互ニ異論致間敷）云々トアルニ依リ原告ハ右契約ニ基キ族院医師ノ診断ヲ受ケ証明セサルヘカラス然ルニ原告カ公廷ニ於テ娼妓営業中病氣ノ為メ医師ノ診察ヲ受ケタルコトナキトノ自陳ニ依レハ健全タルコトヲ証スルニ足ル仮リニ多病ナリトスルモ元來原告ハ娼妓営業ノ収益金ヲ以テ返済スル旨ノ申込ミヲ為シ借用シタル金員ナレハ即チ該営業ヲ抵当ト為シタルモノナリ左スレハ其抵当タル営業ヲ廢センニハ他ニ返済ノ途ヲ立ルカ又ハ被告ヘ示談ノ上廃業スヘキハ当然ナルニ借入金ハ本訴ニ全ク關係ナキト云ヒ且病氣ヲモ証明セスシテ廃業セントスルハ最モ不当ノ要求ナルニ付被告カ原告ノ娼妓廢業届書ニ連印ヲ拒ムハ敢テ不当ニアラサルモノトス右ノ理由ナルヲ以テ判決スル左ノ如シ

原告ノ請求ハ相立タサルモノトス

但シ訴訟費用ハ原告ニ於テ負担スヘシ

明治二十一年八月六日名古屋始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス者也

始審裁判所判事代理

治安裁判所判事 鈴木久良[㊞]

裁判所書記 今井直江[㊞]

㊞ 「貨物品取戻請求事件」（名古屋治安裁判所、M21・10・25 判決）

明治 21 年第 207 号

平生[㊞]

裁判言渡書

原告人愛知県尾張国名古屋区平民かぎ相続人

伊藤トク

後見人愛知県尾張国名古屋区土族

古高正念

控告人愛知県尾張国名古屋区枕水楼出稼娼妓誰人事

林トク

代 人愛知県尾張国名古屋区平民

福島竹次郎

右伊藤トクヨリ林トクニ係ル貨物品取戻請求事件ヲ審理スルニ原告ハ明治十八年十一月中安田清助外一名ノ周旋ニ依リ枕水楼ニ於テ出稼中被告ヲ更ニ新梅本即チ原告方ニ住替ノ事ヲ約シタル処被告ハ一旦郷里三重県下桑名ヘ赴クニ付珊瑚掛玉附簪壺本ノ借入ヲ依頼シ来リシニ依リ引合人諏訪忠和ハ当時原告ノ後见人タリシヲ以テ之ヲ貸与ヘタル処其後被告ハ原告方ニ引移ラス又其簪ヲモ返サス且既ニ売却シタル旨申立ルニ付其見積代金四円ヲ請求スト云ヒ被告ハ本件ノ簪ハ諏訪忠知ヨリ貰受ケタルモノニテ原告トハ関係ナシ故ニ原告ヨリ何等ノ訴訟ヲモ受クヘキ謂レナシ元来右ノ簪ヲ其被告カ貰受ケタル訳ハ忠和ハ明治十八年八月頃ヨリ被告ニ馴染情交深密ノ間トナリシヨリ更ニ枕水楼ヲ転シテ原告方ニ住替ヲ為スヘキ事トセシ処枕水楼ニ苦情アリテ一旦三重県下ニ於テ出稼ヲ為スニ付其際本件ノ簪ハ忠知ヨリ貰受ケタルモノニテ借入シタルモノニ非ス故ニ仮令引合人諏訪忠知ヨリ之ヲ請求スルモ返戻スヘキ筈ナシト云フニ在リ

依テ証拠ヲ閱シ双方ノ弁論引合人諏訪忠知安田清助ノ陳述ヲ聴キ説明判決ヲ為ス左ノ如シ

原告伊藤トクハ本件ノ簪ニ関シ林トクヲ被告ト為シ得ヘキヤ否ヲ按スルニ右ノ簪ハ原告先代カギニ関係ナク引合人諏訪忠知ト被告トノ間ニ授受シタルモノナルコトハ原被告及引合人等ノ申立ニ依テ動カスヘカラサル事実ナリ原告ハ甲第一号証ヲ掲ケ本件ノ簪ハカギノ所持シタルモノナリト云フモ該証ハ信濃屋卯ハナルモノト原告トノ関係ニ止リ被告ニ対スル証拠トシテ採ルニ足ラス又仮令該証ノ如ク一旦カギカ所持シタルモノトスルモ忠知カ被告ニ交付シタル当時尚ホ現ニカギノ所持スル所ナリトノ証拠ト為スヲ得ス故ニ原告ハ本件ノ簪ハ己レノ所持物ナリシコトヲ証明セサル上ハ本件ノ訴訟ヲ為スヘキ権利ナキモノトス

右ノ理由ナルニ依リ原告ノ請求ハ不相立

訴訟入費ハ原告カ負担スヘシ

明治二十一年十月廿五日名古屋治安裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

名古屋治安裁判所

判事 試補 吉 澤 謙 吉㊦

裁判所書記 中 根 正 雄㊦

㊦ 「貸金請求ノ訴訟」(名古屋治安裁判所、M21・10・31 判決)

明治 21 年第 160 号

裁判言渡書

原告 愛知県名古屋区平民無職業

酒 井 金 藏

代人 同県同区土族

諏 訪 忠 知

被告 同県同区平民無職業

内田 文左エ門

同 長野県信濃国東筑磨郡松本遊郭岩岡喜久代方
同居平民娼妓業

内 田 ス ヲ

代人 愛知県名古屋区平民

内 田 ハ ル

右酒井金藏ヨリ内田文左エ門内田スヲニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理スルニ原告
代人ハ明治十七年七月甲戌号証ノ如ク被告内田スヲカ原告方ニ寄留シ娼妓營業ヲ
ナスヘク筈ニテ金貳拾五円ヲ貸渡シ尙同年九月二日ニ至リ甲戌号証ノ如ク金七円
ヲ貸増シ、タル処其後前借金ノ引合不行届ニテスヲハ名古屋区若松町河内樓ニ於
テ營業ナシタルニ付屢々返金ヲ促スモ弁済セス依テ甲戌号証ノ金員モ追テハ請求
スヘキ所存ナレトモ本訴ハ先甲戌号証ノ金七円ニ利足金五円四拾八錢貳厘ヲ併セ之
ヲ受取度ト云ヒ被告内田文左エ門ハ明治十七年七月中スヲ伊藤タイ方ヘ娼妓出
稼ヲ為サシメ金參百拾円ヲ前借スル筈ニテ當時タイノ后見人諏訪忠知ト契約シ其
手附トシテ甲戌号証ノ金員ヲ借受ケスヲタイ方ヘ差遣シ置中忠和ニ於テスヲ
ニ懸想シ屢々色情ヲ挑ムニ付スヲハ之ヲ拒絶スル能ハス遂ニ忠知ニ身ヲ委ネタル
ヨリ家内風波ヲ起シスヲハタイ方ニ出稼スルコト出来サルニ至リタルニ付大ニ当
惑シ忠知ヘ掛合タルニ同人於テ甲戌号証ノ貸金ハ手附流トナシスヲハ他家ニテ
營業サスヘクト申スニ付同年十二月ヨリ十九年十二月河内樓ニテ娼妓營業ヲナサ
シメタリ然ラハ本訴原告ヨリ金員ヲ借受ケタルコトナキハ勿論忠知ヘ対シテモ返
金スヘキ道理ナシト云ヒスヲ代人内田ハルニ於テハ甲戌号証ノ成立タル際スヲ
幼年ニシテ其取引等ニ関与シタルコトナク且忠知ニ懸想セラレ不得止遂ニ其身ヲ

委ネタルコト等ハ文左エ門陳述ノ通ナルヲ以テ原告ノ請求ニ応スヘキ義務ナシト云フニアリ因テ証拠ヲ閱シ説明スル左ノ如シ

被告於テ本訴ノ金員ハ原告ヨリ借受タルコトナシト云フモ甲戌号証ヲ閱スルニ拙者長女ス、貴殿へ今回寄留致シ不日娼妓営業為仕度候ニ付前頭金員云々ト記載アリテ当時原告ハ伊藤タイ方ニ席貸業ヲナシタリト云ヒ諏訪忠知ハ原告営業ニ付金銭ノ世話ヲナシ居タリト云フニ依レハ仮令忠知ト貸借ノ引合ヲナスモ該金ハ原告ヨリ借受ケタルモノト為サ、ルヲ得ス加之忠知カス、ニ懸想シ色情ヲ遂ケタルヨリ家内ニ風波ヲ生シ為メニス、ニ於テ他家へ転シ娼妓営業ヲ為スニ至リ忠知ニ於テ甲戌号証ノ貸金ハ権利ヲ抛棄シタルモノナリト云フモ密ニ口頭ノ陳述ニ止リ其証左ナク又ス、ニ於テ該金貸借ノ当時ハ幼年ナルヲ以テ其引合等モナサ、ルニ付返金ノ義務ナシト云フモ自ラ娼妓営業ヲナシ稼金ヲ以テ返金ニ充ツヘクトノ契約ヲナシタル以上ハ幼年ナリトテ其義務ヲ免ル、ヲ得サルモノトス

右之理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

被告ハ原告請求ノ元利金拾貳円四拾八錢二厘ヲ直ニ償却ス可シ

訴訟費用ハ被告ノ負担タル可シ

明治廿一年十月三十一日名古屋治安裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

名古屋治安裁判所

治安裁判所判事 平 生 忠 辰㊞

裁判所書記 中 根 正 雄㊞

㊞ 「廃業差拒事件」（名古屋控訴院、M21・11・02 判決）

院長 大塚㊞

裁判長 松田㊞

書記 鈴木㊞

陪席裁判官 山岡㊞ 百地㊞

明治 21 年第 158 号

裁判言渡書

控訴人愛知県尾張国名古屋区席貸営業伊藤シヤウ
方寄留同区平民鬼頭庄七長女

鬼 頭 八 重

右代人同県同区士族代言人

友 松 芳 範

被控訴人同県同国平民席貸営業

伊 藤 ^(マ マ) ショウ

右人同県同国平民代言人

依 田 菊太郎

右鬼頭八重ヨリ伊藤^(マ マ)ショウニ係ル廃業差拒事件ニ付名古屋始審裁判所カ言渡シタル裁判ニ服セスシテ鬼頭八重ヨリ控訴ヲ為シタルニ依リ之レヲ審理シ双方代人ノ陳述ヲ聴クニ其要領左ノ如シ

控訴人ノ要旨ハ乙壱弍号証ハ差入タルニ相違ナキモ其実借入シ金ハ五拾円ナリ然ルニ控訴人ハ娼妓営業以來多病ニシテ到底身ニ堪ヘ難キ営業ナルヲ悟リ廃業ニ決心シタルヲ以テ廃業願書ニ被控訴人ノ連署ヲ要ムト云フニ在リ

被控訴人ノ要旨ハ控訴人ハ乙一ニ号証ノ如ク自己営業上ノ収利ヲ抵当ニ充テ置キナカラ疾病ト詐称シ其義務ヲ免レンコトヲ図ルニアレハ本訴ノ請求ニハ応セスト云フニ在リ

依テ証書ヲ閲シ弁論ヲ聴キ説明スル左ノ如シ

乙一ニ号証ハ其金額ニ異議アルニ拘ラス控訴人ノ営業上得ル所ノ益利ヲ抵当ニ充テ被控訴人ヨリ金円ヲ借り受タルニハ相違ナキモ其抵当タル収利ハ娼妓営業ヨリ生スル所ニシテ其営業ハ控訴人ノ行為ニ関シ其行為ハ本人ノ意思ニ関スル者ナレハ良シ控訴人ノ疾病ハ虚構ニ出ルモ控訴人於テ其営業ヲ為ス能ハスト云フニ對シ強テ之レカ実行ヲ望ムハ其帰着スル所明治八年第百廿八号布告ノ旨趣ニ抵触スルモノナルヲ以テ被控訴人ハ本訴ヲ拒ムヲ得サルモノトス

右ノ理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

名古屋始審裁判所カ明治廿一年八月六日言渡シタル裁判ハ之レヲ取消ス依テ被控訴人ハ控訴人ノ娼妓廃業願書ニ連署ス可シ

訴訟費用ハ始終審共被控訴人於テ之レヲ負担ス可シ

明治廿一年十一月二日名古屋控訴院公廷ニ於テ終審ノ裁判ヲ言渡ス者也

名古屋控訴院

評 定 官 松 田 道 夫[㊤]

評 定 官 山 岡 慇[㊤]

評定官代理判事 百 地 宅 憲[㊤]

書 記 鈴 木 重 民[㊤]

㊤ 「損害要償ノ訴訟」（唐津治安裁判所、M21・11・15 判決）

明治 21 年第 79 号

裁判言渡書

原告人佐賀県肥前国東松浦郡平民野添久太郎方寄留
平民娼妓営業

松 永 カ ツ

右代人全県全国全郡平民貸席業

野 添 久太郎

被告人全県全国全郡平民船乗

溝 口 善 六

右原告代人野添久太郎ヨリ被告溝口善六ニ係ル損害要償ノ詞訟事件審理ヲ遂クル
処原告陳述ノ要領ハ明治廿一年九月十日夜当郡殿之浦貸席小宮政太郎方ニ於テ予
テ買馴染ナル遊客被告溝口善六ト出会ノ後被告ハ突然原告ヲ押付其髪ヲ把ルヨリ
早く短刀様ノ刃物ヲ以テ之ヲ根元ヨリ切断シタルコトハ被告ニ於テモ自認スル処
ナリ然ルニ被告ハ徒ラニ辞ヲ飾リ右ハ原告カ承諾上夫婦取替ノ為メ頭髮ヲ切断セ
リ云々ト申立ルモ是レ至テ被告カ遁辞ニ過キサルナリ今其原因ヲ陳センニ被告ニ
於テ曾テ原告ニ対シ営業満期ノ後ハ夫婦トナルヤト尋ネタルコトアリ其節原告ハ
一時ノ戯レト存シ好キ程ニ答弁致シ置キタル末営業柄トテ被告ノ知己ニシテ被告
同村桑田大助ナル者ニ壺両度扱レタルコトアリシニ天草トクナル者右ノ事ヲ以テ
被告カ恥カシメタルコト有之其後二三日ヲ経テ今般ノ所為ニ及ヒタルナレハ被告
カ暴行ハ是等ノ事ヨリ原告ヲ恨ミタルニ起因セシモノト想像ス元ヨリ原告ノ営業
タル裝飾ヲ以テ客ヲ街フモノナルニ被告カ暴行ノ結果原告ハ客席ニ出ルコトモナ
ラサル姿トナリ已ムヲ得ス目下休業致シ居ルコトハ殿之浦村貸席及娼妓元締中山
兵之輔宛届書写ニ徴シ明了ナリ依テ原告カ髪ヲ結フニ至ル迄大凡三ヶ月ノ日晦ヲ
要ス可キヲ以テ本年九月十日ヨリ同十二月九日迄一画私揚代金八拾錢ト定メ三ヶ
月分金七拾貳円損害ノ償トシテ要求スト云ヒ被告答弁ノ要旨ハ昨明治二十年旧六
月頃ヨリ原告松永カツト買馴染ニ相成本年旧二月頃夫婦トスルノ約ヲ結ヒ其証ト
シテ互ニ頭髮ヲ取替ス可シトテ原告ハ当時被告ノ頭髮ヲ切取居リタルヲ以テ本年

九月十日ノ夜小宮政太郎方ニ於テ出会シタルトキ原告ニ対シ前約ノ通り頭髮ヲ切斷シ呉ル、ヤト申シタルニ元ヨリ承知ナリト答フルヨリ直ニ小刀ヲ以テ之ヲ切斷シタル訳ナリ然ルヲ原告ニ於テハ天草トクナル婦人カ被告ヲ恥カシメタルヨリ被告ニ於テ原告ヲ恨ミタル様申立ルモ原告ハ元ヨリ娼妓營業ノ事ナレハ何人ニ招カル、モ被告ニ於テ之ヲ意トス可キ理ナシ元ヨリ取りモ直サス右ハ原告カ承諾上ニ出タルモノニシテ其事実ハ証人磯淵甚蔵ノ証書ニ徴スルモ明ナリ且又原告ハ未タ廃業届ヲ為サ、ル以上ハ今日迄モ引続キ營業致シ居ルモノト想像シ得可キヲ以テ更ニ損害ノ生ス可キ理ナシ依テ原告カ本訴ノ要求ニハ応シ難シト云ヒ証人磯淵甚蔵陳述ノ要領ハ明治二十一年九月十日ノ夜友人三四名ト同道殿之浦貸席小宮政太郎方ニ登楼中被告溝口善六モ参リ居ル旨聞知セシ故同人ヲ伴婦ラント存シ善六ノ寢臥セシ次ノ間ヨリ隙視キセシニ善六ト小鶴（カツノ妓名）ハ同衾致シ居リ善六於テ小鶴ニ対シ夫婦トナルニ付キテハ頭髮ヲ取替ノ為メ遣ス可シト申セシニ小鶴於テ承知シタルヲ以テ善六ハ直ニ小鶴ノ髪ヲ掴ミ之ヲ切斷シタルニ小鶴ハ其頭部ニ手ヲ当テ涕泣シ居リタルヨリ自分ハ大変ト思ヒ其俣婦リタリ云々ト云フニ在リ其所争ノ要点タル第一被告カ原告ノ頭髮ヲ切斷シタルハ原告ノ承諾上ナルヤ否第二原告於テ頭髮ヲ切斷セラレタルカ為メ損害ノ生シタルヤ否ノ二点ニ在リ依テ原被告双方并ニ証人ノ陳述ヲ聴キ証拠書類ヲ閲シ説明スル如左

第一 被告カ原告ノ頭髮ヲ切斷シタルハ被告ニ於テ原告ト予テ夫婦タルノ目的ヲ以テ互ニ頭髮ヲ取替スノ結約ヲ為シ居リタルヨリ終ニ之ヲ実行シタル旨証人ヲ以テ証明スルモ果シテ被告カ言ノ如ク夫婦タルノ約ヲ鞏固ナラシムル為メノ取替ナレハ頭髮ノ箴部分ヲ切斷スルモ猶且足レリ然ルヲ況ンヤ残酷ニモ其髻ヨリ全部ヲ切斷スルニ至テハ為之婦女天然ノ客色ヲ毀損スル耳ナラス原告ノ如キハ目下娼妓營業ノ者ナレハ其妝飾ノ欠缺ハ營業上殊ニ^{ママ}彰害ヲ及ホス可キハ理ノ尤モ觀易キモノナルニモ拘ラス被告ニ於テ後來夫婦トナル可キ目的アル原告ニ対シ斯克無慈悲ノ行為ヲ施シタルハ普通人情ニ反スルノ所置ト云ハサルヲ得ス果テ然ラハ仮令原告ニ於テ之ヲ承諾シタルモノトスルモ其承諾ハ決シテ全部ヲ切斷スルノ意思タリシコトヲ認メ難シ是レ被告カ所為ハ原告カ承諾上ノ行為ニアラスシテ却テ原告陳述ノ如ク原告ヲ恨ミタルノ結果事終此ニ及ヒタルモノト判定ス

第二 被告ニ於テハ未タ廃業ヲモ為シ来ラサル原告ニシテ故ナク損害ノ生ス可キ謂レナシト云フモ原告カ目下現ニ休業シ居ルコトハ殿之浦貸席及娼妓元締中山兵

之輔宛届出写ニ依リ明瞭ナリ已ニ休業セシ事実ノ確實ナル以上ハ之レヨリ生スル
損害ノ額如何ヲ指定セサル可ラス曩ニ口頭審理中原告申立タル如ク原告カーケ月
稼高最多額ハ拾七円ニシテ其最寡額ハ拾貳円トスレハ之レカ平均数ヲ取ルモ一ケ
月拾四円五拾銭ノ額ニ至ル可シ果シテ然ラハ原告ニ於テ更ニ損害ナシトス可ラス
而シテ右ハ被告ノ暴行ニ依リ原告カ将来ニ得可キ利益ヲ失フタル者ナレハ被告ニ
於テ其損害相当ノ金額ヲ償フノ責アルハ理ノ当然ナリト判定ス

右説明ノ理由ナルニ依リ判決スル如左

被告ハ損害ノ償トシテ金貳拾円速カニ原告償却ス可シ

但シ訴訟入費ハ被告負担タル可シ

明治二十一年十一月十五日唐津治安裁判所民事公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡ス
モノナリ

判事試補 熊 田 小 六㊤

裁判所書記 中 村 規矩二㊤

（明治大学法学部教授）